Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　教育科学部門　64　pp.37～49　2009

# 知的障害児と健常児の友達関係についての保護者の意識

渋　谷　真　二・今　野　和　夫

# A survey on awareness of parents about friendship between their children with an intellectual disability and children without a disability

Shinji Shibuya・Kazuo Konno

The awareness of parents about friendship between their children with an intellectual disability and children without a disability is an important factor for their children to make friends without a disability. A questionnare survey was used to parents of upper secondary department of special schools for students with an intellectual disability.

They thought that their children had fewer opportunities to get involved with children without a disability. Many of them wished that their children could have friends without a disability. But there were differences in the degree of wish among them.

This paper concludes with suggestions to the future study about friendship between children with an intellectual disability and children without a disability.

**Key words**：Friendship, Children with an intellectual disability, Children without a disability

## Ⅰ．はじめに

障害のある人たちが地域の中であたりまえの生活，あたりまえの人生を築いていけるために，また生涯をとおして豊かな発達を実現できるためには，障害のある人たちに対する一般の人々ないし社会の理解はもちろんのこと，教育・福祉・医療・労働・民間（例えばNPO）等の諸分野における多様な専門的ないしフォーマルな支援や，親の会・ボランティア団体・家族等によるインフォーマルな支援の充実が欠かせない。そしてさらに，互いに対等な意識・信頼・親しみを持てる同じ年頃の友達がいることも，大切である。ちなみに友達関係の中には，心配したり心配されたり，慰めたり慰められたり，励ましたり励まされたり，相談したり相談されたり，教えたり教えられたり，助けたり助けられたりといった相互支援の要素も，自然と内在している。障害者と健常者の関係については，障害者は健常者よりも支援される機会や量が多いと考えられがちであり，また一般には支援の与え手としての期待のもとに例えばボランティアとして健常者を障害者に関わらせようとする傾向が強いが，相互支援の要素や可能性は障害者と健常者の関係―たとえそれが互いに友達と思える関係にまでは至っていない関係であっても―にも潜在していると言えよう。

ところで知的障害者には，同じ年頃の障害をもつ友達とともに，同じ年頃の障害のない友達もきわめて少ない。このことには，知的障害者と健常者とが出会いかかわりを重ねる中で仲のよい関係を築いていける機会やそのための支援体制づくりがまだきわめて限られていることや，知的障害者の知的能力や社会的能力に制限があるということの他に，我が子にとっての健常の友達の必要性・大切さについての保護者の意識の弱さ，我が子と健常の友達との関係に対する保護者の期待の低さ等が，大きく影響していると思われる。ちなみに保護者の中には，我が子を事故（例えば交通事故）や事件（例えばいじめや性犯罪）から守るために，我が子が友達を作ったり，その友達と休日に出かけたりすることに消極的な意識を持つ人もいるだろう。アメリカの研究では，自閉症の青年が友達として名を挙げた人の中には，親が自分の友達として挙げた人（つまり青年が小さい頃から母親に連れられて繰り返し行った先で出会ってきた人たち）が多く

Akita University



含まれているという結果が得られている（Orsmondら，2004）。

障害者が健常者と地域の中で出会い，親しくなるためには，地域的活動（例えば親の会や青年学級，ダンスや絵画などのサークル）に子どもを積極的に参加させたり（その送迎も含めて），我が子の可能性や魅力や苦手なところ，我が子を心から愛しているということを自然な形で健常者に伝えたりするなど，長い期間にわたっての親からの細やかな配慮がときに必要なようである（Turnbullら,1999）。渋谷（2004）は，大学生としての４年の間におけるダウン症の青年と自分の友達関係の形成過程を振り返り，かつその形成にどのような要因が関与しているのかを考察している。そして，年齢的には少々上の青年と互いに気軽に携帯電話でやりとりしたり，誘ったり誘われたりしながら映画などを地域で楽しんだりするようになるまでには，いくつかの段階があることを明らかにしている。また互いに友達と認め合えるまでになったことには，渋谷自身の側の要因として①青年と出会うまでの多くのボランティア経験，②渋谷自身の他の友達の存在（渋谷を介して，彼らとも青年が親しくなっていけたこと），③ダウン症という障害とそれに関係する特徴や傾向の理解，④青年の母親からの信頼と協力といったことが，特に関与しているとしている。さらに，青年の側の要因としては①幼い頃より障害の有無を問わずたくさんの人とかかわってきており，積極的に人とかかわろうとすること，②携帯電話や電子辞書など自分にとり便利なものの使用法を積極的に学ぼうとすること，③他人への気配り・気遣いや他人とかかわる際のマナーを身につけていることなどを，あげている。一方渋谷（2004）は青年の母親にも面接をし，幼稚園・小学校・中学校・養護学校高等部・学校卒業後の職場（通所作業所）のどの時期においても，我が子が会いたい，話しをしたいと思った人と実際にかかわって・親交を深めていけるようにと，母親が様々な心配りや努力をしてきていることを明らかにしている。

近年，知的障害者が地域の中で健常者と様々な活動を一緒に重ねながら，互いに友達と思える関係になっていくことを支援する取り組みも，ようやく始まりつつある（名川勝,2007）。とは言え，知的障害者と健常者，とりわけ同じ年頃の健常者と互いに友達としてつき合えるようになるまでのプロセスへの支援体制づくりは，これからの大きな課題である。

渋谷・今野（2006）は，このような友達関係の実現にとっては，友達関係についての保護者の意識がある大きな役割を担っていると考え，知的障害者通所更生施設の利用者（41名。多くは20歳台）の保護者に質問紙調査を行った。その結果，半数を上回る保護者は，我が子に同じ年頃の障害のない友達がいればよいと思っていたが，同様に半数以上の保護者はそのことを実現することの困難さを認めていた。

本研究では，知的障害養護学校（現・特別支援学校）高等部の保護者を対象として，我が子と，同じ年頃の健常者との友達関係についてどのような意識を抱いているかを中心に，明らかにしたい。

## Ⅱ．方法

### １．概略

秋田県内の８校の知的障害養護学校の高等部生徒の保護者に対して，「Ⅲ．結果」に記されているような内容を含む質問紙を作成した。各保護者に対する質問紙の配布，保護者から回答された質問紙（回答者の氏名は無記名とした）の回収は，各学校に協力いただいた。質問紙の冒頭には，回答者個々人のデータには言及せず，全体として結果は処理するという旨の文章を記した。調査実施期間は平成18年10月から11月。

男子生徒の保護者からは151名，女子生徒の保護者からは93名，計244名分が回収。回収率は76％。244名の生徒のうち，小・中とも養護学校は36名で全体の約15％。小中とも通常学校は121名で全体の53.5％，小が通常学校で中より養護学校が22％。その他には，小学校や中学校の途中より養護学校に転校した生徒がいる。小中とも通常学校の生徒たちは，特殊学級への在籍の有無や，在籍期間等に違いがあるが，今回の調査においてこの点は把握しなかった。

### ２．質問紙の内容

障害のない友達ができればいいと思って保護者がこれまでに行ったことのある行動，同じ年頃の健常者との現在の関係，及び学校卒業後における同じ年頃の健常者との関係について，「Ⅲ．結果」に記載してあるような質問項目が設定された。なお質問紙の冒頭には，「友達」ということについて，以下のような文章が添えられた。

（「しばらく会わないでいると会いたくなったり話しをしたくなったりする,気兼ねなく自然につきあえる人」というような皆さんが普通に使われている意味でお考えください。また同じ学校の人，同じ性の人に限らなくて結構です。）

## Ⅲ．結果

### １．障害のない友達づくりを意識した保護者の行動

あらかじめ設定された19の項目（その他を含む）について，子どもに障害のない友達ができればいいと思ってこれまでに行ったことがあるものの選択率が表１に記

Akita University



されている。

男子生徒及び女子生徒の保護者全体の半数ほど（53％）が，子どもに障害のない友達ができればいいと思って町内などの子供会やその行事に参加したことがあった。次いで全体の３割以上がこれまで，そのような思いをもって普通（通常）の小学校に入れたり（38％），幼稚園や保育園などに入れたり（33％），他の子どもが好感を抱くよう自分の子どもの身なりに気をつけたり（31％）したことがあるとしている。なお，それらの比率は女子よりも男子生徒の保護者の方が少し高い。また，１割から２割の範囲であり決して多いと言えないが，他の子どもを誘ったり，他の子どもたちやきょうだいの中に導き入れようとしたり，自分の子どものことを他児にわかってもらおうとしている保護者がいる。さらに地域の活動や習い事をさせている保護者もいる。

**表１　障害のない友達ができればいいと思ってこれまでに行ったことがあるもの（複数選択可）**

| 項　目 | 男生徒保護者 | 女生徒保護者 | 合計 |
|---|---|---|---|
| ・町内などの子供会やその行事に参加する | 83(55) | 47(51) | 130(53) |
| ・普通（通常）の小学校に入れる | 63(42) | 29(31) | 92(38) |
| ・幼稚園や保育園などに入れる | 54(36) | 27(29) | 81(33) |
| ・他の子どもが好感を抱くよう，自分の子どもの身なりに気をつける | 53(35) | 22(24) | 75(31) |
| ・普通（通常）の中学校に入れる | 27(18) | 22(24) | 49(20) |
| ・自分の子どもと遊んでくれるようにと他の子どもを誘う | 28(19) | 13(14) | 41(17) |
| ・「一緒に遊べば?」と子ども達が遊んでいる輪の中に自分の子どもを誘う | 20(13) | 13(14) | 33(14) |
| ・きょうだいとその友達が遊んでいるときに,子どもも仲間に入れてと頼む | 17(11) | 15(16) | 32(13) |
| ・自分の子どものことをわかってもらえるよう，他の子どもに話し聞かす | 18(12) | 9(10) | 27(11) |
| ・休日などに活動する地域の団体に参加する | 16(11) | 11(12) | 27(11) |
| ・水泳教室やピアノ教室などの習い事をさせる | 16(11) | 12(13) | 28(11) |
| ・自分の子どもと遊んでくれるようにと子どもをもつ知り合いの親にお願いする | 11( 7) | 7( 8) | 18( 7) |
| ・自分の子どもが他児にからかわれているのを見てもその子を叱らない | 13( 9) | 4( 4) | 17( 7) |
| ・自分の子どもに友達ができるよう，先生に相談する | 7( 5) | 7( 8) | 14( 5) |
| ・自分の子どもの誕生日などに他の子どもを招く | 2( 1) | 3( 3) | 5( 2) |
| ・休日などに活動する地域の団体を自分で立ち上げる | 2( 1) | 2( 2) | 4( 2) |
| ・幼稚園や保育園などの近くに住む | 1( 1) | 2( 2) | 3( 1) |
| ・小学校や中学校の近くに住む | 2( 1) | 1( 1) | 3( 1) |
| ・その他 | 7( 5) | 2( 2) | 9( 4) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は％

## ２．同じ年頃の健常者との現在の関係について

### (1) 障害の有無によらない，同じ年頃の友達の有無

（お子さんには障害があるかないかによらず同じ年頃の友達がいますか）

相手に障害があるなしにかかわらず，自分の子どもに友達が「いると思う」と回答した保護者は，全体の約6割（62％）を占めた。生徒の性差をみると，「いると思う」の回答は男子生徒の保護者では6割弱（56％），女子生徒の保護者では7割（70％）であった。

こうして，その数はともあれ保護者からみて友達といえる存在が，生徒らの半数以上にはいること，そして男子生徒よりも女子生徒の方に友達と言える存在を持つ人が割合として多いということがうかがえる結果が得られた。

**表２　障害の有無によらない、同じ年頃の友達の有無**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| １．いると思う | 84(56) | 65(70) | 149(62) |
| ２．いないと思う | 53(35) | 21(23) | 74(30) |
| ３．わからない | 14( 9) | 6( 6) | 20( 8) |
| 無回答等 | 0( 0) | 1( 1) | 1( 0) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は％

### (2) 同じ年頃の健常の友達の有無

（お子さんには同じ年頃の健常の友達がいると思いますか）

同じ年頃の健常の友達について，保護者全体の３割（30％）が自分の子どもには「いると思う」，６割ほど（59％）が「いないと思う」と回答した。割合としては，女子生徒よりも男子生徒の保護者において，「いないと思う」の回答率が13%ほど多くなっていた。

こうして，高等部の生徒の３割ほどには保護者から見て友達と言える同年代の健常の友達がいること，見方を変えれば６割ほどには同年代の健常の友達がいないこと，性別で見れば健常の友達がいない生徒が女子生徒よりも男子生徒の方に幾分多いということがうかがえる結果が得られた。

**表３　同じ年頃の健常の友達の有無**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| １．いると思う | 39(26) | 33(35) | 72(30) |
| ２．いないと思う | 97(64) | 47(51) | 144(59) |
| ３．わからない | 13( 9) | 10(11) | 23( 9) |
| 無回答等 | 2( 1) | 3( 3) | 5( 2) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は％

Akita University



### (3) 地域で継続的なかかわりをもつ同じ年頃の健常者の有無

(お子さんには地域の活動や習い事などで続けて会っている同じ年頃の健常者がいますか)

「地域で継続的なかかわりをもつ同じ年頃の健常者」というように,「友達」という枠をはずし，かつ「地域」及び「継続的なかかわり」というキーワードを含んだこの問いに対して,そのような存在がいると回答したのは,保護者全体の１割ほど（12%）にすぎず，９割弱（86%）は「いない」との回答であった。そしてわずかではあるが，その「いない」との回答の割合は女子生徒の保護者（82%）よりも男子生徒の保護者（89%）において高くなっていた。

こうして，高等部生徒において，同じ年頃の健常者と地域の中で継続的なかかわりをもつことは非常にむずかしい状況にあることが示唆される。

**表４　地域で継続的なかかわりをもつ同じ年頃の健常者の有無**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| １．いる | 14( 9) | 15(16) | 29(12) |
| ２．いない | 134(89) | 76(82) | 210(86) |
| 無回答等 | 3( 2) | 2( 2) | 5( 2) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は%

### (4) 同じ年頃の健常者とかかわる機会が少ないか

(お子さんには同じ年頃の健常者とかかわる機会が少ないと思いますか)

「強く」(34%）と「やや」(35%）を合わせて，保護者の７割ほどが，我が子が同じ年頃の健常者とかかわる機会が少ないと思っていた。またその割合は，女子の保護者（60%）よりも男子保護者（75%）の方が少し高い。

「どちらともいえない」や「あまりそう思わない」との回答者も，それぞれ10%程度を占めている。

多くの保護者が，我が子は同じ年頃の健常者とかかわる機会が少ないと思っているが，その思いが「やや」の程度と,「どちらともいえない」と曖昧な人を合わせると，５割を占めていた。(3）において，きわめて多くの高等部生徒には「地域で継続的なかかわりをもつ同じ年頃の健常者」がいないことが示されたが，このような結果からは，そのことに対して強い危機感ないし疑問を抱いている保護者は決して多くないことが示唆される。

**表５　同じ年頃の健常者とかかわる機会が少ないか**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| １．強くそう思う | 56(37) | 27(29) | 83(34) |
| ２．ややそう思う | 57(38) | 28(31) | 85(35) |
| ３．どちらともいえない | 19(13) | 17(18) | 36(15) |
| ４．あまりそう思わない | 11( 7) | 14(15) | 25(10) |
| ５．まったくそう思わない | 6( 4) | 4( 4) | 10( 4) |
| 無回答等 | 2( 1) | 3( 3) | 5( 2) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は%

### (5) 我が子に同じ年頃の健常の友達がいればよいか

(お子さんに同じ年頃の健常の友達がいればよいと思いますか)

全保護者中の３割強（35%）が「強くそう思う」，約３割（31%）が「ややそう思う」，約2割（23%）が「どちらともいえない」，6%が「あまりそう思わない」と回答しており，男子生徒・女子生徒双方の保護者間に顕著な差は見られなかった。

こうして，半数を上回る保護者が，そう願う強さに差があるとはいえ，我が子に同じ年頃の健常の友達がいればよいと考えているが，そのような思いを明確に抱いていない保護者も少なからずいることが示唆される。

**選択理由について（付録参照）**

この問については，その選択理由の自由記述欄が設けられたが，そこには多くの内容が記されていた。その詳細についての分析・検討は別の機会に譲ることとし，ここでは簡単に言及したい。

すなわちまず「強くそう思う」理由としては，学びや成長，楽しみやうるおい，相談相手，自立など，我が子にとっての友達の具体的な意義に言及している内容が比較的多かった。親亡き後を視野に入れて意義を指摘している保護者もいる。交流や友達関係を含めて人との関係の少ない現状を指摘する人も少数認められた。次に「ややそう思う」理由として,「強くそう思う」理由と同様に,「共通の話題や情報」「養護学校では味わえない刺激」「ストレスを解消しより楽しい生活」など，友達がいることの色々な意義に多くの保護者が言及している。一方，消極的にではありながらも基本的には友達の存在を希望しつつも,「子どもや親の側の不安や負担」「相手の理解」「差別」など，不安な点のみをあげている保護者も数人いる。

さらに「どちらともいえない」理由としては，我が子

**表６　同じ年頃の健常の友達がいればよいか**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| １．強くそう思う | 53(35) | 33(35) | 86(35) |
| ２．ややそう思う | 50(33) | 26(28) | 76(31) |
| ３．どちらともいえない | 33(22) | 23(25) | 56(23) |
| ４．あまりそう思わない | 7( 5) | 7( 8) | 14( 6) |
| ５．まったくそう思わない | 2( 1) | 1( 1) | 3( 1) |
| 無回答等 | 6( 4) | 3( 3) | 9( 4) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は%

Akita University



に対するプラス・マイナス両面の影響，会話や知的能力等による相手とのギャップ，相手（健常者）の側の事情，さほど必要性が感じられないこと等に関する内容が，認められる。「あまりそう思わない」理由には，コミュニケーション能力など子どもの側の要因への言及や，ことさら健常の友達の必要性を感じないことの指摘（現在の学校に同じ年頃の友達がいることによる）に加えて，健常の子どもたちからの好ましくない影響や，健常の子どもへの強い不信感といったものが含まれている。

### (6) 地域で同じ年頃の健常者と活動をともにする機会

（地域の中に，休日などに障害のある子どもたちが同じ年頃の健常者と活動をともにできる機会があればよいと思いますか。例えば，親の会やNPO，ボランティア団体等による）

保護者全体の5割以上（55%）が地域での一緒の活動機会があればよいと思っていた。程度では「強く」（18%）よりも「やや」（37%）の方が20%ほど高く，また「どちらともいえない」（30%），「あまりそう思わない」（9%）などさらに消極的な思いの保護者も4割ほどいた。一方，一緒の活動機会があればよいと思う割合は，女子生徒（50%）よりも男子生徒の保護者（58%）の方が少々高くなっている。

**表7　地域の中に同じ年頃の健常者と活動をともにできる機会があればよいか**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 1．強くそう思う | 26(17) | 18(19) | 44(18) |
| 2．ややそう思う | 61(41) | 29(31) | 90(37) |
| 3．どちらともいえない | 43(28) | 30(33) | 73(30) |
| 4．あまりそう思わない | 11( 7) | 12(13) | 23( 9) |
| 5．まったくそう思わない | 3( 2) | 2( 2) | 5( 2) |
| 無回答等 | 7( 5) | 2( 2) | 9( 4) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は%

### (7) 学校は生徒たちが同じ年頃の健常者とかかわることのできる機会をもっとつくればよいか

（学校は，生徒たちが同じ年頃の健常者とかかわることのできる機会をもっと作ればよいと思いますか）

学校による同じ年頃の健常者とのかかわりづくりを全体の5割弱（47%）が望んでいた。程度では「強く」（18%）よりも「やや」（29%）の方が10%ほど高くなっている。また，「どちらともいえない」（36%）や「あまりそう思わない」（9%）などさらに消極的な思いを持つ保護者も半数近く（48%）に及んでいる。

**選択理由について（付録参照）**

この問についても，その選択理由の自由記述欄が設けられた。そこに記された内容に簡単に言及すると，かかわることのできる機会をもっと作ればよいと「強くそう思う」理由としては，色々なことを吸収できる，自信をつけることができるなど，障害のある生徒たちにとっての好ましい影響がいくつかあげられている。また，障害についての理解が深まるといった相手にとってのプラスの影響や，そのことがさらに障害のある子どもに及ぼす好ましい影響といったものも上げられている（障害のある子も子どもの中に入っていく勇気をもつことができ子ども同士のつきあいが楽しみになる．子どもたちにとっても住みやすくなる．等）。次に「ややそう思う」理由としても，生徒たちと健常の子どもたちの双方にとっての好ましい意義や，健常の子どもたちへのプラスの意義や期待についての指摘が，比較的多く認められる。

「どちらともいえない」理由となると，相手からのマイナスの影響（本人が混乱したりストレスになって逆効果．子どもたちの心を傷つける．等），健常者への不信感や不安（障害のある子を素直に受け入れてくれるわけがない．理解してかかわってくれる同じ年頃の人っているのか．等），双方の壁や差などが認められる。

**表8　学校は生徒たちが同じ年頃の健常者とかかわることのできる機会をもっとつくればよいか**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 1．強くそう思う | 26(17) | 17(18) | 43(18) |
| 2．ややそう思う | 48(32) | 23(25) | 71(29) |
| 3．どちらともいえない | 54(36) | 33(36) | 87(36) |
| 4．あまりそう思わない | 11( 7) | 12(13) | 23( 9) |
| 5．まったくそう思わない | 4( 3) | 4( 4) | 8( 3) |
| 無回答等 | 8( 5) | 4( 4) | 12( 5) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は%

### (8) 同じ年頃の健常者との関係の可能性について

（お子さんと，同じ年頃の健常者との関係についてどのようにお考えですか）

「わからない」（10%），「無回答」（20%）等を合わせて3割ほどの保護者が判断をしかねていたが，それ以外についてみると，「⑤かかわり続けても，誰とでも互いの心の距離が近づくことは難しい」の選択率は7%（244人中16人）と少なく，一方①②③④を合わせて6割（62%）ほどの保護者は，「誰とでも」あるいは「相手次第ではあるが」，我が子が同じ年頃の健常者とかかわり続けるうちに互いの心の距離を近づけることができると考えていた。

ちなみに，「誰とでも」（①と②で17%）よりも「相手次第」（③と④で45%）で心の距離が近づくことができるとした保護者の割合の方が顕著に高いが，それらの保護者（110人）の中で，加えて「友達関係にまで発展できる」と考えた人（58人，24%）と，「それは難しい」と考えた人（52人，21%）は，ほぼ同数・同率であった。

Akita University



なお，「誰とでも」心の距離が近づくことができるとした保護者（40人）の中にも，加えて「友達関係にまで発展できる」と考える人がいた（24人，10%）。

**表８　学校は生徒たちが同じ年頃の健常者とかかわることのできる機会をもっとつくればよいか**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ①誰とでも心の距離が近づく．友達関係に発展可． | 16 (11) | 8 ( 9) | 24 (10) |
| ②誰とでも心の距離が近づく．友達関係には発展困難． | 6 ( 4) | 10 (11) | 16 ( 7) |
| ③相手次第で心の距離が近づく．友達関係に発展可． | 38 (25) | 20 (22) | 58 (24) |
| ④相手次第で心の距離が近づく．友達関係には発展困難． | 29 (19) | 23 (24) | 52 (21) |
| ⑤誰とでも心の距離が近づくことは難しい． | 12 ( 8) | 4 ( 4) | 16 ( 7) |
| ⑥わからない | 14 ( 9) | 11 (12) | 25 (10) |
| ⑦その他 | 2 ( 1) | 1 ( 1) | 3 ( 1) |
| 無回答等 | 34 (23) | 16 (17) | 50 (20) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は％

①かかわり続ければ，誰とでも互いの心の距離が近づくことができる。また友達関係にまで発展することも可能である。
②かかわり続ければ，誰とでも互いの心の距離が近づくことは可能である。しかし，友達関係にまで発展することは難しい。
③かかわり続ければ，相手次第で互いの心の距離が近づくことが可能である。また友達関係にまで発展することも可能である。
④かかわり続ければ，相手次第で互いの心の距離が近づくことは可能である。しかし，友達関係にまで発展することは難しい。
⑤かかわり続けても，誰とでも互いの心の距離が近づくことは難しい。

### ３．学校卒業後における同じ年頃の健常者との関係

#### (1) 学校卒業後の生活において，同じ年頃の健常者との関係は大切か

（お子さんの学校卒業後の生活において，同じ年頃の健常者とのかかわりは大切なことと思いますか）

表10のように，保護者全体の７割以上（75%）が，卒業後における同じ年頃の健常者との関係を大切と思っていた。程度では「強く」と「やや」がほぼ同率であり，「どちらともいえない」(18%）や「あまりそう思わない」(4%）などのさらに消極的な思いを持つ保護者は２割を上回る程度（25%）であった。

**選択理由について（付録参照）**

この問についても選択理由の自由記述欄が設けられた。そこに記された内容に簡単に言及すると，学校卒業後の生活において同じ年頃の健常者との関係が大切であると「強くそう思う」理由としては（「同じ年頃」というよりも「同年代」と敷衍させている回答もあるが）同じ年頃の人とのかかわりは自然なこと，友人関係の基本である，社会や地域での生活で欠かせないものとの指摘とともに，かかわりが子どもに及ぼすと考えられる（期待しての）多くの好ましい影響・意義が指摘されている。それは例えば，楽しい人生，学びや育ち（考え方の違い．青年期の過ごし方．社会性．等），行動の広がり，相談相手などである。次に健常者との関係が大切であると「ややそう思う」理由も，必ずしも「同じ年頃」に特定されていないようであるが，楽しい休日，気持ちの立て直しや悩みなどの解消といった意義が上げられている。一方「どちらともいえない」 理由としては，いくつかの事情（子どもの障害．良い人と悪い人の見分けが心配．進学や就職をするので無理．等）の他に，障害のない人の態度如何が言及されている。また，同じ年頃に限らず色々な年代と，あるいはより年長の人たちとのかかわりへの期待も記されている。

**表10　学校卒業後の生活において、同じ年頃の健常者との関係は大切か**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| １．強くそう思う | 62(41) | 32(34) | 94(38) |
| ２．ややそう思う | 52(34) | 38(42) | 90(37) |
| ３．どちらともいえない | 26(17) | 17(18) | 43(18) |
| ４．あまりそう思わない | 7( 4) | 2( 2) | 9( 4) |
| ５．まったくそう思わない | 1( 1) | 1( 1) | 2( 1) |
| 無回答等 | 3( 2) | 3( 3) | 6( 2) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は％

#### (2) 卒業後，地域の中で同じ年頃の健常者と活動をともにできる機会があればよいか

（卒業後，地域の中に，休日などに障害のある人たちが同じ年頃の健常者と活動をともにできる機会があればよいと思いますか。例えば，親の会やNPO，ボランティア団体等による）

保護者全体の６割以上（64%）が，卒業後に地域で同じ年頃の健常者と活動できる機会があればよいと思っていた。程度では，「強く」(20%）よりも「やや」(44%）の方が24%も多く，「どちらともいえない」(23%）や「あまりそう思わない」(5%）などのさらに消極的な思いを持つ保護者も３割ほどいた。

学校卒業前の現在についての同様の質問（表７参照）に対する結果と比べて，「そう思う」比率が，男子生徒の保護者（66%），女子生徒の保護者（57%），全体（64%）のそれぞれにおいて10%程高くなっている。そしてここでも，女子生徒よりも男子生徒の保護者の比率

Akita University



の方が少々高くなっている。

**表11　卒業後、地域の中で同じ年頃の健常者と活動をともにできる機会があればよいか**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 1．強くそう思う | 31(21) | 19(20) | 50(20) |
| 2．ややそう思う | 70(46) | 34(37) | 104(44) |
| 3．どちらともいえない | 32(21) | 25(27) | 57(23) |
| 4．あまりそう思わない | 7( 5) | 6( 6) | 13( 5) |
| 5．まったくそう思わない | 3( 2) | 2( 2) | 5( 2) |
| 無回答等 | 8( 5) | 7( 8) | 15( 6) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は％

### (3) 障害者と健常者が友達関係になることを積極的に支援する取り組みについて（身近にあったらよいか）

（海外には，知的障害がある人が障害のない人とかかわり続けて友達関係になることを積極的に支援する取り組みがいくつかあります。例えばその代表的なものとして，アメリカを中心に12か国の大学において広範に展開されている「ベスト・バディーズBest Buddies」という取り組みがあります。これはアンソニー・シュライバー氏が1989年に設立したNPOが運営しており，障害のある人がボランティアの学生と時々電話で会話をしたり，自宅の中や外で食事や買い物，スポーツなどをしたりして関わっています。なおこの取り組みの特徴は，グループ活動よりも一対一のつきあいが重視されているということです。あなたは，ベスト・バディーズと同じものでなくても，障害のある人が障害のない人と友達関係になることを積極的に支援する取り組みが身近なところにあればよいと思いますか。）

海外の実例のような友達関係づくりに向けた積極的な取組が身近にあればよいと，保護者全体の6割半ば（66%）が思っていた。程度では，卒業前（⑦⑧）や卒業後（⑩）についての関連する問への回答率に較べて「強く」が高くなっており（33%），「やや」と同率であった。またこの問にも，女子（60%）よりも男子生徒の保護者（72%）の方で，同意する率が高かった。

一方，「どちらともいえない」（22%）などさらに消極的な考えを持つ人も全体で3割ほどいた。

**表12　障害者と健常者が友達関係になることを積極的に支援する取り組みについて（身近にあったらよいか）**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 1．強くそう思う | 51(34) | 31(34) | 82(33) |
| 2．ややそう思う | 57(38) | 24(26) | 81(33) |
| 3．どちらともいえない | 29(19) | 24(26) | 53(22) |
| 4．あまりそう思わない | 5( 3) | 6( 6) | 11( 5) |
| 5．まったくそう思わない | 1( 1) | 2( 2) | 3( 1) |
| 無回答等 | 8( 5) | 6( 6) | 14( 6) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は％

### (4) ボランティアとの関係づくりの可能性について

（障害のある人と同じ年頃のボランティアとの関係について，あなたはおよそどのように考えますか）

全体的に，同じ年頃の健常者との関係の可能性に関する結果と同様の傾向が見られる。ただしわずかではあるが，①②③④の合計が6割ほど（62%）から7割（70%）へと増え，また③（相手次第で心の距離が近づく＋友達関係にまで発展可）も24%から30%へと増えている。これらのことからは，保護者が，「同じ年頃の健常者」というように漠然と表現されている存在よりも，「ボランティア」という表現を通してその役割を比較的明確に受け止めやすい存在に対して，我が子との間により親密な関係が築かれる可能性を想像・期待しているとも考えられる。

**表13　障害のある人と同じ年頃のボランティアとの関係の可能性**

| | 男子生徒保護者 | 女子生徒保護者 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ①誰とでも心の距離が近づく．友達関係に発展可． | 17 (11) | 11 (12) | 28 (11) |
| ②誰とでも心の距離が近づく．友達関係には発展困難． | 13 ( 9) | 10 (11) | 23 ( 9) |
| ③相手次第で心の距離が近づく．友達関係に発展可． | 45 (29) | 27 (29) | 72 (30) |
| ④相手次第で心の距離が近づく．友達関係には発展困難． | 31 (21) | 19 (20) | 50 (20) |
| ⑤誰とでも心の距離が近づくことは難しい． | 4 ( 3) | 3 ( 3) | 7 ( 3) |
| ⑥わからない | 14 ( 9) | 10 (11) | 24 (10) |
| ⑦その他 | 1 ( 1) | 0 ( 0) | 1 ( 0) |
| 無回答等 | 26 (17) | 13 (14) | 39 (16) |

高等部n=244（男n=151，女n=93）（　）内数字は％

①かかわり続ければ，誰とでも互いの心の距離が近づくことができる．また友達関係にまで発展することも可能である．

②かかわり続ければ，誰とでも互いの心の距離が近づくことは可能である．しかし，友達関係にまで発展することは難しい．

③かかわり続ければ，相手次第で互いの心の距離が近づくことが可能である．また友達関係にまで発展することも可能である．

④かかわり続ければ，相手次第で互いの心の距離が近づくことは可能である．しかし，友達関係にまで発展することは難しい．

⑤かかわり続けても，誰とでも互いの心の距離が近づくことは難しい．

Akita University



## Ⅳ．考察

### １．障害のない友達ができることを願ってこれまでに行ったこと

本研究を通して，知的障害養護学校（特別支援学校）高等部の保護者たちの中には，障害のない友達ができればよいとの思いを抱いて，子どもが小さい頃からこれまでに,町内会など地域の子供会やその行事へ参加したり，入園や入学を決めたりしている人が決して少なくないことが示された。また，子どもの身なりに気を付けたり，他児を自分の子どもの方へ誘ったり，逆に他児たちの輪の中へ子どもを導こうとしたりした経験をもつ保護者も認められた。

障害のない友達がいればいいとの思いをもつ保護者は，そのような思いを抱いて，あるいはそのような思いを実現させるために，一つのことだけではなく色々なことをしたり色々なことに挑戦しているのだろう。一方，そのような思いを最初からさほど抱かない保護者や，そのような思いの実現に向けた早期の行動が良い結果を生み出さないこと（例えば，他児から拒否される）で周囲に不信感を抱いたり自信を失ってしまっている保護者は，友達を作るための行動をあまりしないとも考えられる。保護者の思い（例えば，障害のある子もない子も我が子には大切．障害のある子が友達にいればよい．能力から見て友達ができるわけがない．等）やその背景の違いが，障害のない子どもを我が子の友達にしようとする行動とどのように関係しているのか，今後検討を要するだろう。

### ２．同じ年頃の健常者との現在の関係

高等部の生徒たち，また傾向としては女子生徒よりも男子生徒において，同じ年頃の健常の友達がいる人は決して多くないこと，さらに友達とまでは言わなくとも，地域の活動や習い事などで継続的にかかわっている健常者がいる人となると，とても少ないことがわかった（男子生徒のほぼ９割，女子生徒のほぼ８割）。一方，女子生徒よりも男子生徒の保護者においてより高い数値が認められるのであるが，我が子には同じ年頃の健常者とかかわる機会が少ないと思う保護者の割合（全体で69%），同じ年頃の健常の友達がいればよいと思う保護者の割合（同66%），地域の中で同じ年頃の健常者とともに活動できる機会があればよいと思う保護者の割合（同55%）のいずれも，５割を明らかに超えていた。一方，そのように思う「強さ」に着目すると，いずれにおいても「強く」の割合が「やや」を大きく上回るわけではなく，また「やや」と「どちらともいえない」で５割ないし６割，「どちらともいえない」と「あまりそう思わない」で３割弱ないし４割を占めていた。

以上より，本調査の対象となった高等部の保護者の場合，我が子に同じ年頃の健常の友達を持たせたいという気持ちや，そのことにつながりうる機会を実際に求めようとする気持ちの強い人が多いとは一概に言えないだろう。そしてこのことにはたくさんの要因，たとえば子どもの能力や子どもと健常児とのギャップの大きさへの懸念，高等部の現状（普段の授業の他にたくさんの行事，卒業後に向けた作業学習や現場実習等でゆとりがないことなど）への配慮などが関係しているだろう。さらにこのことには，小学の段階から養護学校に在籍している場合も，中学部や高等部に入るまで通常の学校に在籍している場合も，障害のある生徒たちは学校内外において，これまで同じ年頃の健常の子どもと出合い，かつ様々な経験をともにする中で互いに理解し親しくなっていくプロセス（友達関係となるまでのプロセス）を踏める機会が極めて少ないこと，それゆえ「たとえ障害があっても，我が子は同じ年頃の健常の子どもと仲よくなれる，また友達にもなれる」という我が子への自信や，同じ年頃の健常の友達がいることのよさ（楽しさ，学び，相談相手等）を実感できずにいる保護者が多くいるということも，関係していると思われる。ちなみに数は多いとは言えないが，保護者の中には，これまでの健常児とのかかわりにおいて，健常児に対して保護者が不信感や警戒心を抱かざるを得ない経験（すなわち子ども自身にとってもつらい経験）をしている人が少なからずいることが，自由記述（付録参照）より示唆される。

なお，「生徒たちが同じ年頃の健常者とかかわることのできる機会を学校が作ること」を望む保護者は全体の５割弱，望む程度としては「強く」が２割弱，「やや」が３割ほど，「どちらともいえない」が３割強，等となっていた。そして「強く」や「やや」の選択理由（自由記述）からは，そのような機会を作ることが障害のある生徒にとって意義があるとする保護者とともに，むしろ健常児にとってこそ意義があると考える保護者もいることがことがわかった。さらに「どちらともいえない」の選択理由からは，やはり健常者への不信感をぬぐえない保護者の存在が示唆された。

つぎに，同じ年頃の健常者との関係の発展可能性については，その選択肢の内容が少し抽象的かつ複雑だったせいもあるのか，保護者全体の３割が無回答あるいは「わからない」と答えていた。とはいえ，６割ほどの保護者は，我が子が誰とでも，あるいは相手次第によって，心の距離が近づくと考え，あるいはさらに友達関係へと発展できる（３割強）と考えており，そのような考え（我が子への信頼や期待とも言えよう）の実現を引き寄せられるような学校や地域における実践やそのあり方の検討が急がれよう。

Akita University



３．学校卒業後における同じ年頃の健常者との関係

７割以上（75%）という多くの保護者が，卒業後における健常者とのかかわりを大切と思っていた。そのうち，かかわりが大切と「強く」思う割合と「やや」思う割合はほぼ同じ（４割弱）であった。卒業後に地域でともに活動できる機会についての希望や，友達関係作りに向けた積極的な取組（Hardman　and Clark.2006）についての希望（アメリカのBest Buddiesの例示による）をみると，それらの希望を強くもつ保護者が一定の割合でいる半面（前者で全体の２割，後者で３割強），やはりそのような希望を強くは抱いていない人や，希望を抱いているともいないともどちらともいえない人が，多くいることも確認できた。なお，卒業後における健常者とのかかわりの大切さに関する項目の選択理由の自由記述（付録参照）からは，楽しい人生，色々な学びや育ち，相談相手といった意義の他に，就労やグループホームの利用，親亡き後などのこれから遭遇する現実的課題に対する準備や適応といったことに思いを馳せて，保護者が回答していることが示唆された。また，「同じ年頃」ということを「同年代」や「同世代」というふうに少し年齢範囲を拡大解釈して回答している保護者や，同じ年頃とか同じ年齢でなくてもよいから色々な人とかかわれることを願う保護者，理解してくれる人がいればよいと考える保護者などがいることも認められた。

本調査では，顕著な差とは言えずあくまで傾向としてではあるが，保護者から見て同じ年頃の健常の友達がいる生徒は女子生徒よりも男子生徒において少なく，我が子が同じ年頃の健常の人とかかわる機会が少ないと感じたり，我が子に同じ年頃の健常の友達がいればよいと思ったり，そのような人と地域や学校で出合いかかわることを願ったりする（現在も，卒業後も）人は，比率的に女子生徒の保護者よりも男子生徒の保護者に多いという結果が得られた。本調査で，その回答者はほとんどが母親（女性）であり，同じ年頃の健常の人に対して母親が女子生徒について考えること・期待することと，男子生徒に対して期待することとの違いが，このような結果の傾向に反映しているのかもしれない。ちなみに，同一の生徒について母親と父親がそれぞれ回答したとするなら，果たして父親と母親で同じ傾向の結果が得られたであろうか。いずれにしても，保護者の性差，特に普段の生活の中でかかわりの大きな母親の考え方や価値観は子どもに大きな影響を及ぼすものであり，そのことが今回対象としたような友達作りについてもどのように影響しているのか，さらに検討が必要であろう。

なお，日常の生活においては学校生活，そこでの教師とのかかわりが大きな割合を占めており，友達の大切さや友達関係の形成・発展可能性について教師がどのような考えを持っているのかとか，形成・発展に向けて現に意識的ないし無意識的にどのような実践や言動をとっているのかということも，障害のある子どもの友達づくりに大きく影響しているかもしれない（Turnbull 2000）。関連して，保護者の場合と同様にあくまで推測の域を出ないが，男性教師と女性教師の間にも考えや実践・言動に何らかの違いがあるのかもしれない。

## Ⅴ．おわりに

本研究では，障害のある子どもの現在及び将来の友達作り，とりわけ同じ年頃の健常の友達作りにとって，保護者が大きな役割を担っているのではないかと考え，様々な角度からその意識を明らかにすることを主たる目的とした。今後は，保護者の意識形成（例えば，我が子には友達は必要ない，友達はできない，同じ年頃の健常の友達は大切，どちらともいえない，等）に対して，過去の色々な時期の様々なことがらやその積み重ねがどのように影響しているのかを，事例を通して詳細に把握することが必要であろう。また，事例は決して多くはないだろうが，この調査の質問紙の冒頭に記したような意味での同じ年頃の健常の友達（しばらく会わないでいると会いたくなったり話しをしたくなったりする，気兼ねなく自然につきあえる人）がいる人（生徒や青年）もいるだろう。そのようなペア（つまり相手も同様に思っている）について，そのような友達関係になるまでの経過や友達関係になってからの普段のつきあいの様子などを，保護者など関係者の話を参考にしながらも基本的には本人たちへのインタビューと参与観察を通して，詳細に明らかにする必要もあろう。

## 文　献


1）Hardman,M.L.and Clark,C.（2006）「Promoting Friendship Through Best Buddies:A National Survey of College Program Participants」Mental Retardation,Vol.44,No.1,56-63

2）名川勝編集（2007）「はじめよう！ひろげよう！コミュニティフレンド　ガイドブック＆マニュアル」
ＮＰＯ法人ＰＡＣガーディアンズ

3）Orsmond,G.I.,Krauss,M.W.and Seltzer,M.M.（2004）「Peer Relationships and Social and Recreational Activities Among Adolescents and Adults with Autism」Journal of Autism and Developmental Disorders,Vol.34,No.3,245-256.

4）渋谷真二（2004）「障害の有無を越えた友達関係についての研究」秋田大学教育文化学部平成16年度卒業論文

5）渋谷真二・今野和夫（2006）「知的障害者と健常者の友達関係」

Akita University



秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要　第28号，53-62.

6）Turnbull,A.P,Pereira,L. and Blue-Banning M,j.「Parents' Facilitation of Friendships Between their Children with a Disability and Friends Without a Disability」Journal of The Association for Persons with Severe Handicaps.Vol.24,No.2,85-99.

## 付　録

友達関係に関する今後の研究の展開にとり貴重な資料になると考え，以下では，保護者による記述をあまり手を加えずに詳細に表した。

**＊「同じ年頃の健常の友達がいればよいと思う」の回答理由（cf.本文表６）**

**１．強くそう思う**

・友達は人生を楽しくする・友達とかかわる楽しさを知ってほしい。・余暇の時間を共有でき生活にうるおいが得られる。・友達がいると話しが合って楽しく遊べる。・障害もあるが普通の女の子の気持ちもあるので，休日などは一緒に遊ばせてあげたい。・一緒にショッピングや映画にいける。・視野を広げ色んな考え方を知ってほしい。・友達からたくさんの刺激をもらえ，いろんなことを教えてもらったり覚えたりできる。・大人の中でいつも指示・保護されるより，子ども同士のつきあいの中で共感したり自主性をもった行動をしたりの方が成長できる。・ゲームや普段の話しも色々できる。色んな面で楽しみがふえ元気も出る。・友達から学ぶことも多いし，人に対する態度，言葉も覚える。・友達から刺激を受けて成長していける。・話し遊ぶことで思いやりができる。・友達がいれば相談などもできる。・同年代の友達がいてくれると卒業後にも色々助けてもらえそうな気がする。・親を当てにしないようにするため。・親亡き後に心の支えになる人が何人かいてほしい。・障害の有無にかかわらず心を通わせる友達は必要です。となりにいて安心するというようなふうでよいです。親は，必ず先に死にます。自分ひとりで生きていくときのために友達は必要です。・兄弟姉妹がいないので大人と子どもという関係しか築けないから。・交流のチャンスがほとんどないから。・家の近くにいないため。・家の中で遊び，外で遊ぶことがないから。・養護学校の友達は何人かいるが，他の子どもたちと接する機会がない。・養護学校以外の同年代とのかかわりがない。小学校や中学校の時の同級生は声をかけてくれるが，本人の性格なのか仲間に入っていこうとしない。・地域に同級生もいないため（山村地ゆえ）。・色々な話しをすることで，相手に障害をもっている人のことを理解してもらえる。・障害を理解してくれてつき合える人がいればありがたい。・つらいこと楽しいことを味わう人としてのあり方として。・友達は多い方がいい。・同級生だった友達のことを強く意識してその人たちのいそうな場所に行きたがる。電話をかけたりもする。

**２．ややそう思う**

・同じ年頃ならではの共通した話題や情報にふれられたらいいなあと思うので。親子の関係では話しにくい話題もある。・養護学校では味わえない色々な刺激を与えてくれる。・年頃のため反抗ばかり。同じ年頃の健常者の同性の友達がいれば，友達の意見・注意はよく聞いてくれるのではないかと思う。・自分の悩みを相談したり，一緒に遊ぶことでストレスを解消し，より楽しい生活を送ることができる。・同じ年頃の友達がいればいろんな意味で刺激になるし経験できることにより成長につながる。・今の思いを伝え合える。・自分からコミュニケーションをとるのが苦手なため，相手の方から誘いがあり，この人とならコミュニケーションがとれると思える人となら，同じ年頃と限らず，どんどん人間関係を深めていってほしい。・人とかかわることで得るものは大きい。・休日に一緒に過ごせる人がいたらと思う。・色んな年齢の方とたくさん交流してほしいが同じ年頃の友達からも多くの刺激を受けて成長してほしいと思う。・コミュニケーションがとれないのでむずかしいとは思いますが，同じ年頃の友達がいれば少しでも刺激があっていいのではと思います。・いないよりはいる方が楽しい時間を過ごせるし，プラスになることもあると思います。・友達がいれば会話の範囲が広がると思う。・社会性を身につける。・子どもの障害を理解した友人がいれば本人が楽しく過ごせるのではないかと思う。・同じ年代の話題が心の成長につながると思う。・養護学校内で話しをする相手ではなく家に帰ってきて話のできる相手がいればもっといろんなことを覚えるのでは。お互いを分かり合えて一緒にいて安らげる友達がいたらよいと思います。・近くに住んでいる同じ年齢のいとこに自分からときどき会いにいきたがるので，友達が欲しいのだろうと思うから。・学校在学中は養護学校の友人はいると思うけど，卒業後近所に友達がいたらいいなと本当に望んでいる。・障害を理解し友達としてかかわりがあると親も安心していられるが，何もわからないままのつきあいでは子どもも親も不安だし両方（子どもたち）に負担がかかると思う。・友達がいれば確かによいとは思いますが，コミュニケーションが下手な子なので，一方的にそうしたいと思っても相手があってのことだと思います。・相手の理解度によって，どのような関係を作れるかよくわからないので。・あまり通常の生活にあこがれてもらってもどうなのかと思ったりするので，複雑です。・障害者であるという差別をあまり受けたくない。

**３．どちらともいえない**

・友達と楽しく会話したり遊んだりという機会もよいが，友達からの影響も良くも悪くも大きいので用心が必要。・外出先等で中学時代の方と会うとみなさん声をかけてくれるようです。電話も来ます。でもそれは友達としてなのか，からかい対象なのかわかりません。うれしい反面，悪いことをされないか利用されないかとても不安です。・いればいろいろな意味で刺激を受けることができ，視野を広げる可能性はあるが，その反面，いいように使われたり（パシリや面倒なことをさせるなど）イジメの対象になるなど，不安材料もたくさんある。・健常者とかかわることで自分を卑下したり自信をなくしたりしてしまう。しかし，おしゃべりや体を動かすことが大好きなので，そのようなかかわりの中で自分のレベルアップにつながったり，あこがれを持ち，ますますのやる気につながる。・良いことも悪いことも見た目（表面的なこと）だけをまねしたがる。・障害に理解があるかどうか。できる，できないの差が出るかもしれない。・能力の差から無理あるいは考えられない（６件）。・同じ年頃のお友達がいることで学ぶことも多いが，ギャップも多いのでは。・みんながみんな子どもの障害を理解してくれるとは限らないし，年齢が上がってきているので自分のことでいっぱいいっぱいだと思う。・相手の考え方による。相手がかかわりを持ってもいいとすすんで思わなければ，相手の負担になるから。・本人が相手を友達と思っても相手が同じように思ってくれないことが多いように感じます。お互いの気持ちのずれは時にストレス

Akita University



となったりしないかと思います。・障害のない同じ年頃の人でも，勉強，進学，就職，友人関係など様々な問題を抱えている年頃だと思われます。何のためらいもなく障害のある人と友達になるには無理があると思います（小さい頃からの友達であれば別かも）。同等というよりボランティア的立場になるのではと思います。・「友達」といった対等の立場にはなれず，相手の子にはボランティアというか，お願いして付き合ってもらうことになるから。・友達関係というよりは面倒を見るという感じになると思う。・健常者の子どもたちとは，上手につき合えないし，声をかけてくれないのでかわいそうになる。・障害の有無にかかわらず自然体でつき合えるということは理想です。以前より柔らかく接してくださる人たちが増えているのはありがたいことですが，同じ年頃の方々にかぎらず，まだまだ社会全体に大きなハードルが感じられます。・ひとりで好きな趣味をやっているのであまり友達を欲しない。・夏冬の長い休日に遊びに来るし，電話をかけたりしているから。・一人で好きなことをしていることでリラックスしている様子が多い。誰かと一緒を必ずしも望んでいないのではないかと思う。・弟が友達みたいになっている。・障害のない同年代の友達がいることが本人にいいのかわからない。人間を障害がある人とない人に分けるのはどうか。

**4．あまりそう思わない**

・コミュニケーションがとれない。・同年齢の友達が小さい頃からのつきあいで息子をわかってくれるならまだいいが，息子が他の人への関心を示さないため。・コミュニケーションがとりづらいので相手にしてもらえないと思う。・「友達」というようなかかわりを持つことはむずかしいと思う。「同級生」「チームメイト」の関係づくりで精一杯なので「友達」はその先という気がする。・今の子たちのよくなさそうな行動や考えに染まりそう。・普通の子の中には，少しでも自分より劣っていると思う子を平気でいじめる子がたくさんいます。子も親も嫌な思いをたくさんしてきているので，理解のない人の中には二度と入れたくない。・今の学校で同じ年頃の友達がいるので。

**5．全くそう思わない**

・わけがわからない子どもだから。・だまされたり利用されたりするから。・中傷やイジメ，ケガなど心配。同じ年頃にこだわる理由がない。理解し合えれば年齢に関係がないと思う。

**＊「学校は生徒たちが同じ年頃の健常者とかかわることのできる機会をもっと作ればよいと思いますか」の回答理由（cf.本文表８）**

**1．強くそう思う**

・経験の積み重ねが人生を切りひらく。・色々なことを吸収できる。・いつも養護学校ばかりだと普通の子どもたちとの接し方がむずかしくなってしまうので。・子どもさんにもよりけりですが，自分をあたりと比較できる。自分の行動に不安なところなどあっても，いろんな場面でまねっこできる。そうして自信を付けることができる。・社会に出て活動する上でとても大切。自分の子どもだけでなく相手にとっても心の成長につながる。・色々な（特に重度）障害をもった子どもがいること，接し方，かかわり方など知ってほしい。・一般の子ども（人）の方にも障害をもつ子ども（人）に対する理解が深まると思う。・かかわる機会が多ければ，例えば障害のない子も障害について理解してくれるようになり，積極的に声をかけてくれたり仲間に入れてくれたり。障害のある子も子どもの中に入っていく勇気をもつことができ，子ども同士のつきあいが楽しみになる。・お互いを知ることで偏見や差別を少しずつ取り除くことができる。・学校間の交流で障害者の理解が広がっていくと思う。地域で生活していく上で，同年代の方々の理解や支援は必ず必要。・親が高齢になったとき同じ年頃の方の支えが必要となるから。・学校単位での交流の回数を増やしてほしい。そうすることで地域の中に入ることができ理解されて，違和感を感じない区別ない集合になっていくように思う。・障害を理解するというか，障害をもった人と付き合うことによる健常者のメリットはとても大きい。子どもたちにとっても住みやすくなる。・同じ年頃だけでなく，様々な年齢の人と出会う機会を学校で是非つくってほしい。・もっと同じ年頃の子どもさんと遊べる機会をつくって欲しい。・小，中と普通学校で過ごしてきたので交流をふやしてほしい。・強くそう思うがむずかしいのでは。相手が素直に受け入れてくれるのでしょうか。

**2．ややそう思う**

・学校の行事の一環ではどの程度まで友達になれるか。でも気の合う人と巡り会えるかもしれない。・養護学校という特別のところにいると社会全体とかかわり合うことがとても少なくなる。どんなに重い障害があっても，同じ社会の中で生きていくためにはかかわり合うことが必要になると思います。障害のある人も普通に社会の中に生きているということから知って欲しいと思います。（養護学校では許されることでも普通の社会の中では許されないこともある等）。・障害者も健常者とかかわって協力し合って生きていく生き方が楽しい。同じ年頃の人たちにも障害者とかかわることでプラスになることも多いはずです。・相互理解。障害の特徴を知りかかわり方を知ってもらう。・障害を知らない人が障害を理解する手助けとなる可能性がある。障害者への刺激となる。・交流回数を多くすることで子どもたちと他校の生徒（健常者）との思い違いが解消できると思う。・障害の程度には個人差があり色々な人たちがいることを理解して欲しい。・障害のある子どもたちの存在を知って欲しい。・養護学校という枠の中ではむずかしいのかな。でも学校生活の中で障害をもっている子どものがんばっている姿は見せていくことは大事だと思います。・自分の子のためにというよりもそのかかわった子たちがいろんなことを感じてくれればと思う。その場を提供することが大切だと思う。・かかわり合う機会はつくってほしいが限度もあるだろうし，現に精一杯行ってくれてると思う。・親の希望では友達がいたらうれしいのですが，それは無理なような気がしますから「ややそう思う」と答えました。・今でも交流活動はやっているのでこれからもやって欲しい。・健常者が障害者と接することの意義や対処の仕方を心得ていればよいがそれ以外は無理なことがあると思う。・学校生活が彼らの生活の大部分だから。

**3．どちらともいえない**

・学校単位での交流は，関わる機会を作るという意味ではよいと思うが，ボランティアは受験にプラスになる，と表面的なものになる場合も考えられる。・相手の受入れ方がよく分からない。・お互いが理解してくれて心の底からうち解けあってくれればよいが，現実はむずかしいし，健常の子が障害のある子を素直に受け入れてくれるわけがない。・理解していただくまでにはかなり時間等が必要では。・やはり相手次第だと思います。こちらがどんなに関わり合いを求めても相手にその気がなければ何の意味もな

Akita University



いと思うので。同情やボランティア精神だけでの関わり合いはどんなものかと思います。それとも在校中はとにかくいろんな人と出会い，かかわり合いをもった方がいいのでしょうか。・かかわってあげてるって考えの子どもたちとは，かかわっても得るものがない。どうしても色眼鏡がつく場合が多いのでは。理解してかかわってくれる同じ年頃の人っているのか不安です。・身体や知的部分に障害があって今の状態であるわけですから，健常な方々の意識がこちらに歩み寄って来ていただかないと不用意にこちらから「一緒に一緒に」と思ってもかえって摩擦を起こす危険があると思います。・学校は行事がたくさんあって時間をとれないと思う。・今の学校でも十分に同年代の人たちとかかわっている。多種多様にかかわっても時にはそのことで本人が混乱したり，ストレスになって逆効果なのでは。・形式的な理解のない出会いは，子どもたちの心を傷つけることがある。・色々な人にかかわることはとても大切。でもそれを学校にお願いするのはちょっと大変かな。本当は親が一緒に参加してやれれば一番よいかと思います。でもなかなかそうも出来ない。・子どもの世界でも人間関係はむずかしいので。・子どもたちの性格もまばらなので交流もなかなか進まないと思う。気の合う同士で密度とより高度の内容をすごさせて欲しい。・その子どもの状態で違うと思うので。・障害の軽い人はそういった機会を持てればいいと思います。・今どのくらい機会があるのかよく分からないので。でも学校で計画を立てることがあればそれはありがたい機会だと思う。・学校で機会を作ってくれればとも思うが，行事等で忙しくむずかしいと思います。・学校生活（舎）での生活行動範囲で十分だと思います。・障害のある子とない子の壁は高いと思う。・同年代の健常な子とは，精神的に差がありすぎる。・学校という枠の中では教師がいる手前，本来の姿がお互い出ないのでは。

**４．あまりそう思わない**

・今までもそういう機会をもっていただいているので十分だと思う。・無理に機会を作っても１，２回で心が通じるとは思わない。・学校は行事行事で大変だと思う。・かかわることのできる機会を作ってくれているからです。・同じ年頃の子とは，友達関係になる前にだまされて利用されひどい目にあってしまいそうで，怖いから。・学校では同じ年頃の人たちとほとんど毎日過ごしているので，特にこれ以上機会をもたなくてもいい。・障害のある子どもが普通の子どもの中に入ることはいいが，普通の子どもたちは理解と思いやりをもって接して欲しい。・現在の交流回数でよいと思う。・友達（健常児）と付き合いをもつよりも，本人たちの自立や生活が大事。

**＊「学校卒業後の生活において，同じ年頃の健常者とのかかわりは大切なことと思いますか」の回答理由（cf.本文表10）**

**１．強くそう思う**

・子どもの友人関係の基本となっていると思うから。・我が子は人と関わることでとても良い表情になる。また楽しそうな人たちの中にはいるとその場にいるだけで楽しそうである。楽しい人生を送ってほしいので，出来るだけ人と関わらせていきたいと思う。同年代の人と関わるのは，ごく自然なことだと思う。・やっぱり上から見下されるだけじゃ本人も行き詰まってしまうので。本人が友人だと思ってる人たちと話したり行動して楽しいことを体験することがなければ人生つまらないから。・自分との考え方の違いをわかってくれたらよいと思う。・青年期の過ごし方など見習うことがある。・自分だけの世界から他にも色々なことがあるということを知ることが出来る。・情報交換。仲間意識。・いつも上からの指示に従う立場，保護される立場ではなく，対等につき合える人との関係があれば行動にも広がりが出てくるのではないかと思います。・同年代との交流は，いろんな意味で必要。男性も女性も時にはケンカ，ぶつかりい合うことで自分を知ってもらえるし相手のこともわかる。・自分が障害をもっていてもできないこととか努力しようと思えるようになると思うので。・お互いに社会性を養うことができまた協力し合ったりお互いを思い合ったりする心が育って行くと思います。年齢を重ねるごとに人と人のかかわりが大切だと考えます。・自分の子どもが同世代の傾向を敏感に察知する機会を得るから。・互いが意識し合うことでやる気が生まれると思うので。また社会性が広がっていくのではないか。・卒業しても交流の場があったら仕事の悩みなんか相談したらいいのではないかなと思う。・学校を卒業すればよけいに相談する相手が必要だと思いますし年上よりも相談しやすいということもあると思う。・学校内にいるときは自分で付き合っていけそうだなと思う人とは話したり行動を共に出来ますが，社会に出て会社などに入社した時などは，まわりの人たちとのかかわりが多くなっていくと思うので，同年代の人とのかかわりはかなり重要なことになっていくと思います。・社会に出て色々な人たちとかかわって生きていかなければいけないためです。・地域での同年代の方々の理解や支援をいただかないと障害をもつ方々は自立した生活を続けていくのが困難と思われるため。・卒業後，今までかかわっていた友達とは離れてしまう可能性もあるので（どういう形でもいいので）このままずっと付き合うことができればいいと思います。・地域で生活していくためにはかかわりを持てる人が多くいた方がいろんな場面で助けられるとは思う。・同じ年の子どもたちとのかかわりは親子のかかわりよりも長く続くと思う。親が子どもの一生を見てやることができない。・同年代の人に我が子の障害や個性を理解してもらいたいと思う。・同じ年頃とか関係なく人とのかかわりは大切かと思います。・本人がそう願っていると感じるから。・興味や考え方がより近く，ある程度は日常的な会話であれば会話が成り立つと思うので。

**２．ややそう思う**

・休日などを楽しく過ごせるのでは，と思うから。・同年齢の人となら自分が落ち込んでいたりしても，同情してなぐさめてもらうことによって，次へと起きあがってチャレンジする気力が湧いてくると思うから。・子どもの世界が広がる。・「障害」の枠以外の刺激がありそうだから。・いろんな年齢層の中で同年代の人がいるなら自分の年を認識しやすい利点があると思う。・ある程度は交流がないといつも大人の中で守られている状態になれてしまうから。・「仲間」がいるというのは心強いことだと思う。・友達といった関係でなくても同世代の人とのかかわり（一方的に世話してもらうとしても）は大切だと思います。子どもが思春期を迎えて同世代の人への関心が高まっていると思うことがよくあるからです。・職場などでいろんな年代の人たちとのかかわりがあると思うが，またその中での悩みや緊張をとるためにも，気心の知れる人との関わりがあってもいいと思う。・卒業してしまえば同年代の人と会う機会が少なくなる。孤立しないようにさせたい。・職場に行けば同じくらいの人もいると思います。見れば話しも

Akita University



したいと思うでしょう。いきなりよりは慣れておいた方がいいと思います。・地域で生活することから人として友人がいて休みに会ったり楽しく過ごせたらいいなと感じます。現在は休日は親がどこかへ連れて行ったり一緒に常に過ごさないといけないので，子どもも退屈しているかな。よその子どもさんが，ゲームをしたり映画にきたりしてるのを見るといいなと。ただ小さい頃は馬鹿にされたりつらいこともたくさんあったので，子どもは正直なのでそのあとやさしい気持ちを育んで成長された人ならばいいですが，同じ年でなくてもつき合えたらいいと思います。・理解があってのつながりやかかわりは心を伴うものだと思うから。・卒業後，または将来的に，グループホームを希望しているので，同じ年頃の人もそうなのですが，上の人，下の人とのかかわりは大切だと思うので。・障害があることで対等のつきあいは出来ないと思うが，家にこもらないで外に積極的に出て活動してほしいと思うから。・いつまでも親が近くで見守っていることはできるわけはないのでそんな時に話し相手になってくれる人がいればと思います。・本人が年上に安心感をもっているため。・卒業後はどこに行っても人のかかわりは大切です。同じ年の人たちだけではなくつきあいは大切です。・一般就労もむずかしいし，成人式やその後の節目のお祝いや同窓会など，養護学校や施設単位というのが寂しい。小学校は普通学校の特学だったので，その頃の人たちとも会わせてみたい気もするし，（本人はそういうことは言わないがあくまで親の希望）何かしらのかかわりはあってもいいような気がする。・卒業後，無差別に子どもとかかわりをもたせるのではなく，せめて偏見のない子どもや大人とかかわりを持たせてあげたい。・社会人として人とのかかわりは大切。・一般企業の就職を希望しているので障害のない人ともなかよくできないと仕事ができないので。・いま現在，卒業後はどうなるかわからない状態なので…でもたとえどこに行っても少しはかかわりをもっていってほしい。・かかわりがもてるような進路を目指しているので。・障害のある子を受け入れてくれる人と関わり合えて理解してくれたら理想的だと思います。・積極的な考えではありませんが，必要性は感じています。・地域の中で生きていくためには必要なことだと思う。・健常者が障害者と接することの意義や対処の仕方を心得ていればよいがそれ以外は無理なことがあると思う。・同世代の人たちから受ける刺激というものは大切だし，理解が必要だと思うから。・そうは思うが，知的能力が普通の子とはかけ離れてゆくので，親としては自然の成り行きと相手次第（どう思ってお付き合いしてくれているか）だと思うので，こちら側の考えを強引には通すとは思いません。

**3．どちらともいえない**

・小学生の頃から地元から離れているのでいま現在あまりかかわりがないのでこれからも望めないと思っている。・本人の成長を見ながらそのときの様子による。・それぞれ進学や仕事をするようになり無理と思う。・子どもに障害があるとむずかしいと思う。・子どもの状態を思うと。・卒業後については社会人として学校の囲いもなくなるので，良い人，悪い人の見分けが心配。アドバイスしてくれる同じ年頃の人（ボランティア）がいてくれれば安心かもしれない。・障害のない人がある人に対してどうかかわるかによって大きく違ってくると思います。障害者を友人として認めて受け入れてくれるのならばかかわりも大切ですが，一段見下して馬鹿にした態度で接するのであれば，必要のないものと思われます。・かかわる年代は同じ年頃と限るとは思わないので，色々な年代とかかわっていけるとよいと思います。・本人は同じ年頃の人よりもあたたかく接してくれる年長の人を好んでいるように思うから。・同じ年頃の方々に受け入れて頂けるのはありがたいことですが，年齢にかかわらず，色々な年代の人たちの理解が深まることを希望します。もしかしたら，人生経験の豊富な年齢の方が「友達」となりうる可能性もあるわけですから。・一般の方々とはむずかしい（大切だとは思いますが)。どちらかというと同じように障害をもっている人との横のつながりを強く大切にしたいと思います。

**4．あまりそう思わない**

・別に友達がいなくても困らないから。・特に同じ年頃の人でなくても，いろんな人と関われたらいいと思います。・同じ年頃でなくても理解し合える人がいればよいと思う。

**5．まったくそう思わない**

・わけがわからない子どもだから。